
「最期まで食べたい」～人生の最終段階における超高齢血液透析患者の意思決定を尊重した事例～

医療法人衆和会 長崎腎病院

○浦川麗加 岩永敦子 青柳真生 山中真樹子 丸山祐子 原田孝司 船越 哲

【はじめに】

当院では終末期の透析患者を受け入れており、経口摂取困難による経管栄養や胃瘻も増加している。今回、誤嚥性肺炎を繰り返す患者の意思を尊重し、最期まで経口摂取を継続した症例を経験したので報告する。

【症例】

97歳男性、血液透析歴1年で認知症はなし。透析中の血圧は安定している。今回は不顕性誤嚥性肺炎の診断で入院した。

【経過】

絶食、輸液治療を開始後も内服時唾液誤嚥や排痰困難があり、いわゆる終末期肺炎の状態、経口摂取は困難と思われた。しかし患者と家族は誤嚥のリスクを理解した上で、経口摂取を強く希望されたため、多職種で慎重に検討し経口摂取を再開した。最終的に誤嚥性肺炎で永眠された。

【考察】

成人肺炎診療ガイドライン 2017 では誤嚥性肺炎や終末期肺炎のアセスメントに「個人の意思や QOL を考慮した治療・ケア」が含まれている。今後もアドバンス・ケア・プランニングを意識し、十分な倫理的配慮の上で、患者と家族の状況の変化に対応しながら支援したい。